

は研究の対象にはならない。これを標的に頁をくつていくと、三二頁から「生々乳製法」が書いてある。生々乳とは砒素を含んだ不純な昇汞のようで、原料をみてみると『黴瘡秘録』とほぼ同様であるが、焼き上げ法をみると、上火下水法という方式で吉雄耕牛も利用した方法である。

この「秘伝」の内容は、漢方的処方、軽粉を含む処方、薫薬方、外用薬、生々乳乃至ソツヒルを含む処方と、順序よく書かれていてひとつの特徴となっている。

また各処方について、島鴻子漸選の『医方卷石秘録』で追求めてみたところ、次のことが判明した。「秘伝」の全二六処方のうち十三処方を「秘録」に見出した。そしてこの十三処方のうち、十二処方が内服薬であった。その上、八処方について出所が判明した。(例えば五宝丹は『万病困春』、解毒剤、如神丸は吉益流、反鼻散は饗庭太仲流等)

さらに興味深いのは「秘録」にある南蛮流処方(ハシリコン処方、カンフラ処方等)は「秘伝」になく、「秘伝」にある生々乳乃至ソツヒル処方については「秘録」にはないという関係を見出した点である。以上により「秘伝」の方が「秘録」より新しい処方が盛られており、ツェンベリー来日直前頃(二七〇年頃)の長崎で流行した治療が「秘伝」に記されていると推測できた。

この処方集の最後に、ソツヒル処方がある。これは書体からみて後の別人書き込みと考えられるが、オランダ流製法にもとづくソツヒル(ソツピルマート)をなままって縮めた呼び名で昇

汞のことがあることで、長崎の吉雄先生の秘伝らしくなった点は可笑しい。

なお、薫薬法という薫煙吸治療法ものっており、これについては平成十一年九月例会において別に報告したので参照されたい。

(平成十二年一月例会)

永井 潜——断種法上の人びと(その三)

岡 田 靖 雄

日本で断種法を推進していた人たちの頂点にいた永井潜ひまは、一八七六年(明治九年)一月一四日に広島県賀茂郡竹原町の、代代酒造家の家に、一三名同胞の二番目・第二男としてうまれた。第一高等学校をへて、一九〇二年(明治三五年)二月に東京帝国大学医科大学を卒業した。同級に小池重、佐々木隆興、遠山郁三がいた。医師免許はとらなかつたという。翌年一月に大澤謙二教授の生理学教室にはいつて助手。三月には横浜をたつて、主としてドイツ国ゲチンゲン大学のマクス・フェルヴォルン教授のもとに留学し、主として冬眠動物の新陳代謝を研究した。イギリス、フランスにまなで、一九〇六年に帰国して、九月二九日に生理学教室の助教となつた(第二講座担当)。一九一五年(大正四年)一月二五日には大澤のあとをうけて教授となつて第一講座を担当し、生理学総

論および植物性機能につき講義した。生理学に物理化学の実験技術・理論を導入したのがその功績とされるが、実験をしないとの批判もあった。講義は美辞麗句をつらねるものであったという。遺伝学、民族衛生学にも力をいれ、アイヌ調査を組織してもいる。一九三四年(昭和九年)二月二十七日には長與又郎のあとをうけて東京帝国大学医学部長となり、一九三七年三月三十一日の定年退官にいたる。この間に一九三〇年一月三〇日に日本民族衛生学会を発足させて、死去までその理事長だった。

東京帝国大学退官の年に台北帝国大学医学部長となつて、医学部を設立。翌年には北京大学北京医学院長となつて中国人医師の養成に尽力した。敗戦後引き揚げ。一九五二年(昭和二十七年)には日本性学会を設立して、死去までその会長だった。一九五七年(昭和三十三年)五月一七日に脳軟化症で死去、八〇歳。

永井はひろい社会的関心ももっていたようで、暉峻義等を労働科学にむかわせるきっかけをつくつたのもかれであった。『現代日本朝日人物事典』が永井の項をかくことは、この事典の人物選定の妥当性に疑いをいだかせる。

永井は文筆家をもつてきこえ、そのおもな著書だけでも三〇冊をこえるという。『医学と哲学』(一九〇八年、のち『医学と哲学』)、『生命論』(一九一三年)、『生物学と哲学との境』(一九一六年)、『人生論』(一九一六年)、『反逆の息子』(一九二五年)、『科学的生命観』(一九三四年)、『優生学概論(上)』(一九三六

年)、『民族の運命』(一九四八年)、『哲学より観たる医学発達史』(一九四八年)、キンゼイ報告「人間に於ける男性の性的行動」(監訳、一九五〇年)などがそれである。なかでも、『医学と哲学』、『生命論』、『生物学と哲学との境』、『人生論』などは版をかさね、医学生にかぎらず読書人に愛読されたようである。わたしも母(旧制女学校で家政学をおしえたことがある)の蔵書で、新書版の『科学的生命観』を何回もよんだ。永井はまた詩人であり、和歌をつくつたという。

日本では一九一七年に日本優生学会が設立されたが、世の注目をあびずに消滅したという。一九二九年(三〇年か)阿部文夫が国際優生学会よりかえつて優生学会設立を提唱。その夏に東京帝国大学医学部生理学教室で設立会議がひらかれて永井が理事長に内定した。優生学の名が俗用されていることから、学会名としては「日本民族衛生学会」となった。一九三〇年一月三〇日日比谷公園市政講堂で、この発会式があげられた。

その設立趣意書は「今や新マルサス主義サンガー主義は世界を風靡し、諸文明国民族の生物学的勢力を絶えず蝕みつつあります。心ある民族衛生学者も社会医学者も、又文化歴史家も、社会政策家も、声をそろへて国民素質の将来のために悲痛なる警戒の叫びを挙げてゐます。我日本もつひにこの世界的風潮の外に立つ事が出来ず、仏・英・独などが過去数十年を通し嘗め来つた苦い杯を、今嘗めんとしてゐるのであります。而も思想に於ける唯物論、生活態度に於ける享楽主義、

経済生活に於ける最近の世界的不況は、益此勢を煽り立ててゐます。固より正しい産児調節その事自体は、決して悪くはありません。併しながら若し其指導に於て誤つたならば、其趨くところ真に寒心の外ありません。頼もしい相談と正しい指導と、何人も今これを熱望して居ます。この要求の下に生れたのが、日本民族衛生学会です」とかきだされている。日本人の体質遺伝の根本的調査、それらの発表・知識普及が事業としてとりあげられ、「我等の事業は多くの難関を前に控へてゐるに拘らず、実に意義深き學術機関であり、又日本民族の百年の大計を立つるもので、真の意味の愛国的事業といふことが出来ませう」などとむすばれている。

一九三一年三月二三日に機関誌『民族衛生』が創刊された。一九三四年四月二日、三日の第三回學術講演会は第九回日本医学会第一二分科会として日本優生学会の名称で開催された（日本医史学会が日本医学会第一分科会となつたのと、おなじときである）。一九三五年七月一〇日に財団組織の日本民族衛生協会ができ（財団登記は一九三八年八月六日）、日本民族衛生学会はその學術部となつた。

永井は『民族衛生』誌の第六巻までに八回の巻頭言をかき、その一つでは「よき種を選び／＼て教草／うゑひろめなむ野にやまにも」の明治天皇御製をひいている。第一巻に「民族衛生学の使命」を二回かいているが、これは未完のままである。ゴルトン、メンデル、ガスナーの伝記もかいているが、メンデル伝は第六巻までに九回かいているが、これも未完に

おわっている。第三巻には「断種法に対する反対の反対」をかいている。一九三六年四月二五日発行の第五巻第一・二号の巻頭言では、民族百年の長計を熟知し大量断種を断行した大政治家はアドルフ・ヒトラーあるのみ、として、「ハイルヒトラー」をくりかえしている。第五巻第三・四号にのつている「民族衛生振興の建議」は具体策として、日本民族衛生研究機関の設立、断種法の制定、結婚相談所の設置、民族衛生的思想の普及徹底、各種社会政策の民族衛生的統制、をあげている。

同誌は、第六巻までは横書きの啓蒙的學術雑誌だったが、第七巻からは横書きの純學術雑誌になつている。第六巻までの永井の執筆は前記のほかに二、三のちいさいものだけで、第七巻以降にはかれの文章はたえ（日本にいなかった）、死亡の年の第二三巻第二号に巻頭言をかいた。初期の『民族衛生』誌でみると、断種問題につきよくしらべ、よくかいた理論家というべきは、医学者では吉益備夫であつた（かれについては、来年に報告する予定である）。

このほかに永井は、いくつかの医学雑誌・婦人雑誌・総合雑誌などに民族衛生に関する論文をかいていて、婦人雑誌にかいたものがいくらかおおい。

永井は一九一六年に発足した保健衛生調査会の委員であつた。その第三回（一九一六年七月二二日）の記録に「永井委員ハ「ユーゼニツク」ニ関スル調査事項ヲ設ケタシト提議セリ」とある。公的機関で優生問題が提起されたのはこれが最初で

あろう。そののちの記録に、一九二六年一月執筆依頼の永井委員の優生学の話は未完だとある。

永井の民族衛生の主張の基本は、民族資質の向上であり、ベースコントロールのコントロールをもとめ、メンデル、ゴールトンをはひき、畑よりまず種と主張する。一九三六年の読売新聞には、「民族の花園を荒す雑草は断種手術によつて根こそぎ刈取り日本民族永遠の繁栄を期さねばならぬ」などのかれの談話がのつている。かれの論文は、メンデルの仕事のこまかな紹介におおくの部分をさき、また明治天皇御製を引用し、全体に植物育種学的色彩がつよい。人間の病気についてかれがのべることはすくなく、その内容もかなりずさんである。この点は、かれが生理学者であつたことをかんがえても、人間の病気についてかれはよわすぎたようにみえる。そして、かれの論文は迫力をかいている。

雄山閣の優生学の講座の『民族衛生学概論』も下巻をだしておらず、前記の未完論文ともあわせて、多筆の人であつた永井としては意外なことである。

日本の断種法案には、対象を遺伝病に限定しないものと、遺伝病に限定したものがあつた。日本民族衛生学会は遺伝病に限定した断種を推進する立場をとり、一九三六年には民族衛生学会の考え方にもとづく政府案が準備されるころまできた。永井は日本民族衛生学会理事長としてこの過程におおきく関与していたが、『民族衛生』誌上にはこの具体的過程はあらわれていない。こののち永井は台北、北京にうつつた

ので、国民優生法制定の具体的過程には関与していないのだろう。

こうして、永井は断種法制定運動の頂点にたつ人ではあつたが、その遺伝学理解はメンデルをおおきくでてはいなかつたようで、理論的指導者というよりはロマンティックなアイデアオーグであつたとみえる。戦後の著作でもかれの基本的考え方はかわつていない。なお、かれは性の問題をはやくからとりあげており、戦後は主としてひろい性問題にとりくんでいった。

(平成十二年一月例会)

医学館の学問の形成について

町 泉寿郎

江戸医学館の学問を特徴づけるものは、いわゆる「考証学」と呼ばれる文献の正確な把握を重視する学風である。よつて、医学館の学問についての考察は、江戸時代における考証学の系譜という文脈の中でとらえることができる。この学的系譜を考察する上で、当面の著者の問題意識は次の三点にある。

- 清朝考証学の摂取の問題
- 寛政異学の禁が与えた影響
- 古学派・古方派および蘭学との関係

本誌に収載された拙稿三報「医学館の学問形成(一)(二)